

====このお便りは私が担当する太極拳教室のみなさんに8月を除き毎月お届けしております。====

この「雲の手通信」が、2004年4月の第1号発行から本号で第50号を迎えました。これも、読者の皆さんの応援やご助言のおかげと感謝しております。これからもよろしくお願いいたします。

トピックス 11月3日に北地域野外太極拳開催

第10回の「北地域野外太極拳」が、以下のとおり開催されることになりました。秋の一日を他の教室の皆様と太極拳で楽しく交流できる貴重な機会ですので、ふるってご参加ください。

日時； 11月3日（文化の日） 10時～12時（集合9時半） 【雨天中止】

場所； 都立大島小松川公園・自由の広場（江戸川区側です）

交通； 都営新宿線「東大島駅」東口下車、北へ徒歩8分（西口からは約10分かかります）

参加費； 500円（10月15日までに各教室で申し込んでください。）

注；「北地域」とは東京都支部の中の「荒川区、板橋区、江戸川区、葛飾区、北区、江東区、墨田区、台東区、豊島区、練馬区、文京区」の11区からなる東京都支部内の組織です。昨年同じく11月3日に葛西臨海公園で開催された同野外太極拳には49教室から372名が参加しました。

健康妄語録 映画「闇の子供たち」を観て

いま話題の映画「闇の子供たち」を観てきました。最初は細々と単館系の映画館でだけ上映していたのですが、あまりに反響が大きかったので、急遽全国で広く上映されるようになりました。私は有楽町の映画館で見ましたが、平日にもかかわらず満員でした。江口洋介、宮崎あおい、妻夫木聡と人気俳優が競演していることにもあるのですが、やはりこの映画の訴えているテーマの重みが人を集めているのだと思いました。

これは今から4年前、2004年に出版された梁石日の同名の本（幻冬舎文庫）（右はその表紙）を映画化したものですが、本は今でも売れ続けて最近42万部を突破したそうです。取り上げられているテーマはアジアなどの最底辺で広く行われている幼児や子供の誘拐や買い漁り、そしてその結果起きている幼児買売春、臓器移植などの恐ろしい闇の世界を鋭くえぐったものです。映画の結末は本よりもさらに衝撃的です。

私は4年前にこの本を読んで強い衝撃を受け、それから臓器移植の問題に関心を持つようになりました。臓器移植の倫理的な、医学的なまたこのような社会的な問題から目をそらせてはいけないという想いから、この「雲の手通信」でも数回にわたって取り上げてまいりましたが*、この映画を観て、ことの重大性を再認識しました。決して気楽に観られる類のものではありませんが、やはりお勧めの映画です。【*雲の手通信第14号～16号（「脳死は人の死ではない臓器移植の話——」その1～3）、雲の手通信第24号「海外での臓器移植の問題点」をご覧ください。】



左顧右眄～さこ・うべん～

【第2話 太極拳・この深遠なるもの】

10. 太極拳の目的は本当に“益寿延年不老春”だったのか？

ところで、“益寿延年不老春”という言葉は第1話でご紹介した「十三勢歌」の結句としてたいへん有名な言葉です。「十三勢」は陳王廷時代から伝えられてきたいわば太極拳の原型といわれる拳法の名

称で、「十三勢歌」はその拳の技法の理論的な要諦を簡潔に歌ったものですが、“その目的は益寿延年不老春にあり”とした結句は実は私はいささか唐突に感じていました。つまり当時の実践的な武術の目的は本来あくまで“強い武術の追求”であって、その訓練の結果として、あるいは過程として、それが健康に良いとしても、あくまで付随的な「効用」に過ぎないはずで、「目的」ではないですね。そこに大きな違和感を持っていました。

第1話の『10)「戚継光」から「陳王廷」へ』で述べましたように、明軍の武将であった陳王廷は明王朝が倒れると突如引退して故郷の陳家溝に引きこもってしまいますが、これ自体、征服者の清王朝から見ればきわめて不埒な話で、謀叛のたくらみありと疑われても仕方のない行動です。しかし、一族の長である立場からすれば、一族郎党や、領地、財産の安全のためには最低限の自衛の体制は絶対必要です。日常的な武術の訓練は怠りなく行わなければなりません。まさにそうして連綿と陳家の武術は後世に伝えられてゆくのですが、「十三勢歌」の結語をあえて“益寿延年不老春”としたのは、意図的に付け加えた「たてまえ」と考えると、この唐突さはよく理解出来ます。

つまり「十三勢」はけっして危険な武術ではなくあくまで“益寿延年不老春”を目的とする健康法ですと言う「たてまえ」「看板」を掲げることが権力者に対する一種の「護符」(お守り)になるということです。これは、絶対的権力者である皇帝の支配する国家、中国を生きる人民の知恵であったということですね。

時代は下って、さしもの繁栄を誇った清王朝にも衰退と混乱の時代がやってきます。相次ぐ黄河の氾濫、阿片戦争、太平天国の乱、と続く大事変で、中原の農地は荒廃し、農民などが次第に流民となりあるいは盗賊と化する一方では、生産、物流、領地、街を護るための保鏢(ボデーガード)や自警団には多くの武術者が加わりました。また、嵩山少林寺のように地方軍閥の内乱に巻き込まれて徹底的に弾圧され、ほとんどの僧兵たちが殺戮されたという悲惨な事件も起こりました。

こうした時代を楊露禪や武禹襄は生きていたのです。彼らは来るべき大変動を見越して新しい時代に“安全に生き残ってゆく太極拳”を模索したのです。そのためにあえて首都の北京に出て来て肅王の保鏢として楊露禪を送り込み、また貴族、士大夫らに健身法としての太極拳を教えることにより太極拳の社会的レベルの引き上げを図り、かつその裏づけとしての拳理を武禹襄が「太極拳経」として公開したのです。かくして、“盗賊と用心棒の武術”と呼ばれていた拳法の世界から「太極拳」を切り離して、その社会的な地位を高めることに成功したのです。始祖である陳王廷が詠った「十三勢歌」を武禹襄はここでもうまく利用していることはすでにご説明したとおりです。

太極拳各派の後継者たちは清朝の崩壊と中華民国建国、さらには日中戦争という激動と苦難の時代にあって「実用」と「健身」の二枚看板をたくみに使い分けて生き延びます。そして新中国建国後ついに太極拳を国家的な「健身法」として公認させることに成功したわけです。それが1956年の「簡化二十四式太極拳」の制定です。その後、気功や拳法などまでもが大弾圧を受けた文化大革命の不幸な時代を乗り越えて、「健身法」*として公認され、かつ広く普及した強い基盤の上に、「競技」*を目的とする新しい展開があり、あるいは「実用」*を目的とする太極拳も復古しているというのが現状であると思います。【*本稿の「3. 太極拳の目的は？」(第43号)参照のこと】

中国が生んだ「太極拳という文化」の深遠さ、複雑さ、多様性をこうした歴史から学び取ることがたいへん重要なことなのではないでしょうか。(第2話・終わり)

旅をうたい拳を詠む 50号を記念して

50号はようやく道の半ばにて100号峠へさらに登らん
歩一歩時と歳とを重ねつつ太極拳もこの通信も